



TITLE:

2006年度岩本ゼミ活動報告

AUTHOR(S):

佐藤, 健太

CITATION:

佐藤, 健太. 2006年度岩本ゼミ活動報告. 岩本ゼミナール機関誌 2007, 11: 75-78

ISSUE DATE:

2007-02-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56959>

RIGHT:

2006年度岩本ゼミ活動報告

佐藤 健太

春合宿

春合宿は金沢で行った。

内容としては、以下の2冊の本を輪読した。

- ・ 「ベン・バーナンキ 世界経済の新皇帝」
田中秀臣 講談社
- ・ 「奇妙な経済学を語る人びと エコノミストは信用できるのか」
原田泰 日本経済新聞社

「奇妙な経済学を語る人びと」は2回生に担当してもらった。この本では、筆者も冒頭で述べているが、経済学は真実を得るための有益なツールであるのだが、これが本来の目的に使われず、これで奇妙な経済学が語られていると言っており、テーマは、世界経済から日本経済まで多岐にわたるいくつかのトピックを抜粋して、それぞれに対して、真実を示していくものである。2回生にとっては様々なトピックが扱え、3回生には後期でのインゼミに向けて、理論を正しく適用するためにもいい学習になったのではないと思う。

「ベン・バーナンキ 世界経済の新皇帝」は3回生が担当した。この本を選んだ背景として、この時期、ちょうど、FRBの新議長としてバーナンキが就任した頃であり、ホットな話題としてゼミ生の多くが関心を抱いていたからである。内容としては、バーナンキの経済理論の概要から始まり、日本経済との関係性にまで触れるものであり、後半はやや難しい内容となっていたため、苦労した人も多かったかもしれない。ただ、3回生として、新学期に向けてよい学習ができたのではないかと考える。

ゼミ合宿全体としては、交通面で、雪に見舞われることや、夕飯の店に右往左往するなどの予期せぬアクシデントに見舞われたが、これをも楽しく乗り切り、現地の市場や兼六園と観光も楽しめ、ゼミ生仲良く昼・夜と充実した時間が過ごすことができた。

前期ゼミ

国際金融を勉強した。

サブゼミでは有志により、ミクロ・マクロのコア科目の学習が行われた。

正規のゼミは、例年通り、テキストの輪読形式で進めた。この際、毎回、2回生と3回生でペアを組み、自由にそのペアで発表をするという新たな試みを取り入れてみた。(結果として、いろいろ意見があるが、個人的には2回生との関わりが少しは多くなったと思った)使用したテキストは、「International Economics THEORY&POLICY」(Krugman Obsfeld 著)という英語の原本を扱った。訳・専門用語が適切でないことや、理解が違うために、先生方・先輩方には多くの力をお借りした。2回生もしかり、3回生も原本で読んだため、非常に予習・復習に時間がかかったかと思うが、この経験は大きいものだと思信している。今後の改善点を述べると、やはり、後半疲れが出てきたせいもあってか、失速気味になる人がちらほら見られたのが気になったところで、発表に工夫をこらしてみるなり、議論をもっとすることで刺激が加えられれば一層よかったのではないかと思う。

サブゼミはゼミ生がみな忙しく、あまり多くの人数が集まることができなかったが、少ない人数の中、最後までミクロ・マクロをしっかりと学習した人びとには敬意を示したい。来期は、より多くの人数の参加と後期に生かすものになればいいかと思う。

夏合宿

夏合宿は、三重、伊勢のあたりで行った。

後期のインゼミに向けて、早い段階から準備をグループごとにしていきたいという思いがあり、この合宿から、3つのグループに分けて発表の内容から決めていってもらった。

ディベート班は、テーマがまだ交渉段階ではっきりと決まっていなかったため、「貧困の終焉」(ジェフリーサックス著)を読み、各々が気になったことを発表して、共通の土台作りを行った。ISFJ班は、去年の論文を土台にさらなる飛躍を求めて2回生は基本知識、3回生はそれに関する発展的論文を読んで発表を行った。そして、今年度新たに発足した三大学班(詳しくは後に記す)は、FTAに関する論文を書く土台作りとして「地域貿易協定の経済分析」(遠藤正寛著)を輪読した。

やっている内容がそれぞれ異なったが、それぞれの班が後期に行う内容を理解するいい機会が得られたと思う。

後期ゼミ

後期は、インゼミに向けたグループワークが中心となった。今年度の班は、ディベート班、ISFJ論文班、三大学論文班の3つに分かれて、内容もそれぞれ異なることとなったが、毎回のゼミを通じて、それぞれの進行状況を報告し、先生や先輩方、ゼミ生の意見を参考に修正を加えていった。

ディベートは例年通り、高崎経済大学の矢野ゼミと行った。テーマは、IMFの政策の移行期のロシアへの影響がプラスかマイナスかとなった。世論的にはIMFの政策が失敗だったというものがほとんどであるが、岩本ゼミ側は、あえて、批判される側から事実を検証してみたいという思いで、プラス側を選択した。やはり、苦難の連続であったが、本番はIMFのマクロ安定化政策に焦点を当て議論を進めることができたため、勝利をすることができた。反省点としては、早目から交渉に入ったものの、お互いのゼミのテーマに差異があり、テーマ決めに難航し、スケジューリングがきつくなったこと、本番で、国際金融の理論的な話し合いに緊張感や勉強不足から持っていくことができなかったことで、改善点が多く見られた。この中、追い込みでの連日尽力を尽くしてくれた真戸原君をはじめとするゼミ生に感謝したい。

ISFJ班は去年のISFJに出した国際収支の不均衡に関する論文を土台にして、さらなる発展を目指していった。こちらは、リーダーの晝間君が、3回生が発展的内容、2回生が基本的な内容とうまく分担を行い、しっかりとしたスケジューリングで少ない人数ながら、去年の論文の完成度をさらに高めたものができあがったと思う。ISFJ班には三大学論文発表会にも出てもらい、いい評価を得られ、本番のISFJにおいても、賞を受賞という快挙を成し遂げることができた。

三大学班は、今年新たなる試みとして始まった、京都大学岩本ゼミ、大阪大学阿部ゼミ、神戸大学中西ゼミの3つのゼミによる、国際経済学の合同論文発表会に向けた論文を作成する班であった。この班は、当初、FTAの形成に伴う、外部への負の影響が存在しないFTAを理論的なアプローチから分析しようと試みたが、このテーマは理論的にも非常に難しく、なかなか糸口がつかめず、最終的に、FTA形成に伴う、外部への影響の実証分析を行うこととなった。ただ、難しいことに立ち向かっていった、チャレンジ精神はゼミ全体として今後も続けていってほしいことであり、リーダーの寺嶋君を中心とした最後の追い込みは非常に頑張っていたと思う。日程的にも一番長かった班であったけれども、2回生・3回生ともに最後までよくやってくれて、来年につながるものになったと思う。

後記

まず、1年を通じて、先生・先輩方の多くの助けがあつてこそ、ここまでやってこれたと感じている。改めて、お礼を言いたいと思う。

ゼミ活動を通じては、ゼミ生が、一人一人大きく成長できた年であった。

3回生は各々、試験・就活などで忙しい中、ゼミに時間を注ぎ、無事全て終えることができたし、2回生は、3回生に負けずに、どの班でも意見をいうことができ、大きな戦力として成長を遂げたと感じる。

大学において、仲間と作業をする機会やここまで集中して勉強に取り組めるという環境は学部においてはゼミ以外ないと考える。来年は、この機会をいっそう有効に使うべく、さらなる飛躍を目指して、学内一アカデミックかつ活気あるゼミを目指して行って欲しい。